2023年度　第13回無料上映会　主催: 室蘭工業大学「発達障害の映画を観る会」

「友達やめた。／梅切らぬバカ」報告集

2024.1.27(土)　室蘭工業大学 大学会館多目的ホール

・上映会の参加60名（内スタッフ11）。感想会参加21名。アンケート集計54（スタッフ6を含む）。

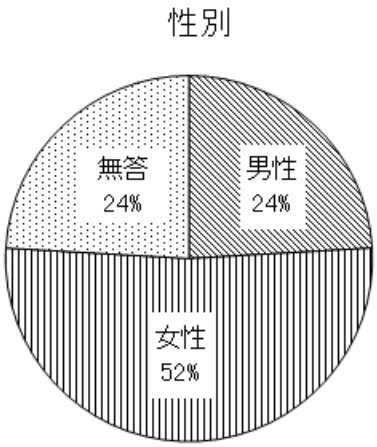
・ネット上（フォーム）でアンケートを受け付けました。6件の回答がありました。

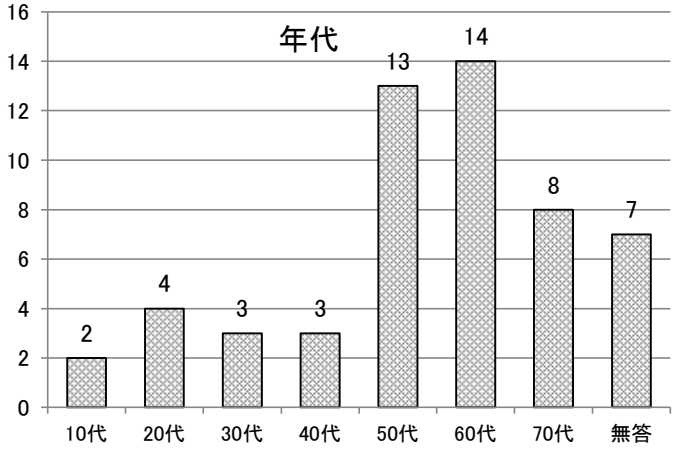
・集計結果は質問順に載せています。グラフの数値はパーセントです（一部で人数）。

・結果に対する考察をしています。発達障害のイメージ調査も報告しています。ぜひご覧ください。

・ご来場、アンケートご記入、調査へのご協力などに感謝申し上げます。

回答者のプロフィール





1　上映①「友達やめた。」の印象（両作品の感想も含む）

・友達に断られることがある他人を見たことがあった

・苦手を乗り越える清々しさ

・当事者の思いを少しでも聞く事ができたこと

・少しわかりにくい

　主人公の性格に腹が立った。

・特性がわかりやすい

・自分の周りの色々な顔を思い出す

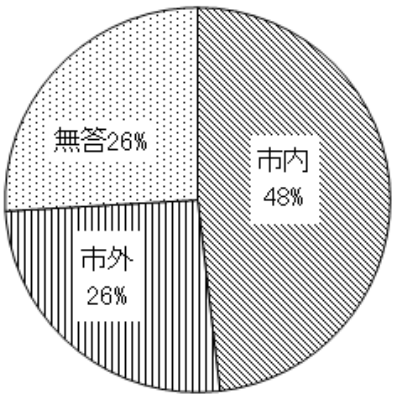
・おもしろかった

・ちょっと映画監督の目線がきつく感じた。

・発達障害の影響なのか本人の性格なのかわからなかった。

・２人の別の障害を抱えた方の葛藤と姿勢に感動した。

市内外

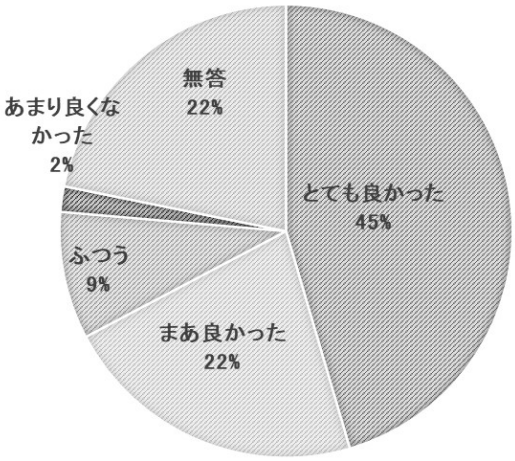


・私自身も難聴気味で障害者未満です。大人になると、学生時代には縁のないタイプと付き合う機会を得たりとするので色々と重ねて見てしまいました。

・アスペルガーの方と付き合うのは本当に難しいと感じたから。

・ふつうとは何か何となく分かった。

「友達やめた。」の印象



・アスペの考え方が少し理解できた

・観てない

・せきららな描写

　仕事上は難しい。

・主題がつかみにくかった。

・音がすごくなってたから

・とてもしっかり

・本音のぶつかり合いが自然で良かった。

・ありのままでいていい友達関係。素敵です。

・とことん疑問に思う所が話し合え納得できた

・自分の常識と相手の常識を合わせる。向き合う時が必要であることが分かった。

・しかし、その時はいつなのか？話し合う分かりあう時って。

・女性の自立を平易な表現で映画を作ってる女性が結局アスペのまあちゃんと距離を上手くとれずに疲れながらまあちゃんと向き合う姿に見てるこっちも疲れるから

・ろうあの方の作品という点と当事者同士の自然なやり取りがリアルでした。

・アスペの方の思いを率直に

・お互いにぶつかっても『つながっていたいよね』というところが良かった。

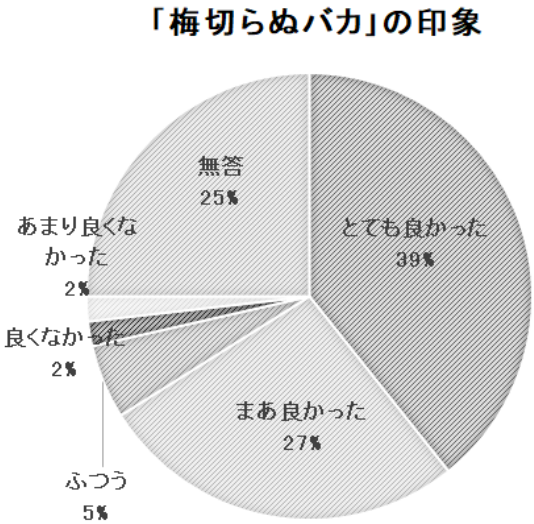
・お互いに、相手を理解するということが必要なのだと思います。『友達やめた』を見て、相手の理解には、障害の有無は関係ないとも、思いました。ろう監督の映画で、少し手話の勉強もさせて頂きました。ありがとうございました。

２ 上映②「梅切らぬバカ」の印象

・日常生活を送る上での大変さを少しでも知ることができたこと

・今の社会にとって相容れない存在でもその相手は人であり、

家庭があり、生活があることを強く実感した



・映画として面白い

・髪切ってたことが面白かった

・タイトルを聞いたことがあった

・コメディとしても面白かった。

・新しい知識として見れた。

・現実では映画みたいにいかない。

・親によって、子供の性格が影響を受けるのは障害の有無に関わらずだなと思いました。（忠さんと哲さんを見て）

・娘が知的障害なので他人事ではないから。

・もっと深くつっこんで欲しい。浅いと感じた。

・有名な役者さんが演じることで抵抗なく見やすい作品だと思いました。

・今回は観なかったのですが、以前伊達の上映会で観ました。

・忠さん、セリフが少なくて塚地さん良かった。

・ドキュメンタリーが良い

・つかじさん上手

・キャストの方々の演技がとても良かった。

・周囲の人間の変化模様が興味深かった。

・障害者の視点が温かく心地良かった

・発達障害の方の視点で観る事が出来た。

・室蘭で以前上映されたので

・グループホームの中の人ってどう生活しているのか興味があった。

・母の愛が全てをとかすのですね。同感をかみしめています。

３ 開催全体ついての感想

・字幕を付けて下さってありがとうございます！

・会場が暖かくて良かったです。

・新聞を見てわからないことを電話で確認しようと 思ったが、通じなかった。

・スクリーンが小さい

・寒かった

・このままでいて下さい。

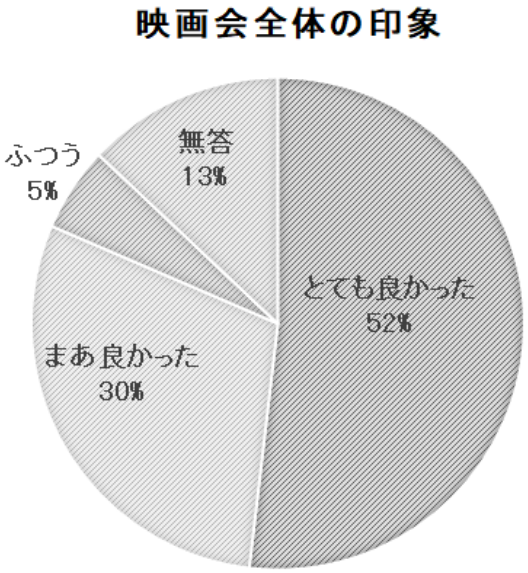
・座りっぱなしは疲れる

・上映回数を増やしてほしい

・友達やめたの音量が大きかった

・会場費など問題はあるが、原点回帰で市民会館の上映会も良いのでは？

・車椅子での訪問も快く受け入れて下さりありがたい。



４　発達障害について思うこと

・体系的に学ぶ機会があると良い

・発達障害と診断されることが多くなったと思う。意思疎通や行動が理解できるよう支援をお願いしたい。

・発達障害の利益（ギフテッドなど）ばかりが注目されすぎだと思う。

・もっと関心を持とうと思った。

・身近にいないので、映画ではあるが理解（というよりお互いに理解しあう）していきたいと思います。

・世間は何だかんだ言っても結局発達障害を排除している。

・個性と思います。

・生きづらさはあると思います。理解が広まればいいなと思っています。

・（診断は受けてはいませんが）私も多分そうなのですが誰しも発達障害の特性があると思います。

・何かを共にすることによって少しでも共に生きやすくできるかいつも考えています。

・周りの理解、世間の人々の理解がもっと優しくなればと思っていますが実際はかな

り難しい。

・腹立つ人が多かったりする。

・私のおいもアスペルガーですが、親子の努力、並大抵なものではない。カバーしてあげたいと思います。

・お菓子がそこにあることが気になってしまうとのこと。へえでした。

・発達障害にも色々な形（？）度合いがあって、1人1人が生きやすくなる為には、一人一人を理解したり、向き合い方を考える事なのでしょうが、なかなか難しいと感じます。

・精神障害がなければ、自由な付き合いが可能と思った。

・広く伝われば良い

・人の心の中は他人には分からないけど、人は子供でも人の愛はどういうものが愛で、そうではないかわかるので、人の愛を自らの中に見出せないなら障害うんぬん関係なく愛がない関係はどんなものにも虚しさしかない。

・最近認知されてきているけれど、実際の付き合い方をもっと学びたい

・誰もがどこかで発達障害と思う

５ 来年の映画会参加

参加予定　３１（５７%）、　不参加　２（４%）、　無回答　２１（３９%）

これまでに観た映画

1	2	3	4	5	6	
ぼくうみ	ちづる	DX	窃盗団	シモン	みんな	
4	5	3	8	5	10	（人）
7	8	9	10	11	12	
音符	魔法	Mommy	500ページ	だって	靴ひも	
6	6	8	8	7	13	（人）

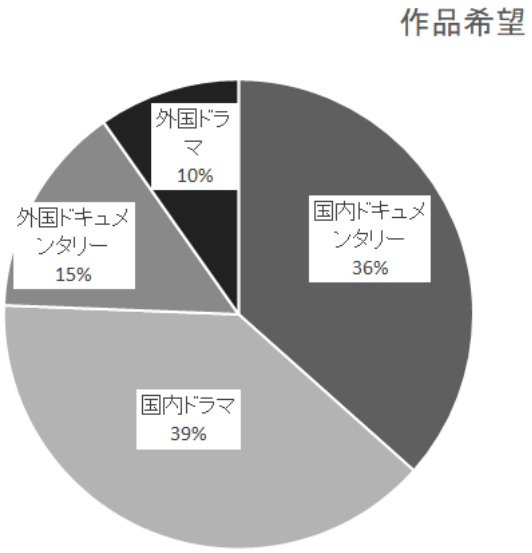
他に、無回答（初めての参加を含む）２７人

映画の正式名称

1)ぼくはうみをみたくなりました、 2)ちづる、 3)ＤＸ（ディスレクシア）な日々/あした天気になる？、 4)３９(サンキュウ)窃盗団、 5)シンプル・シモン/逃げ遅れる人びと、 6)みんなの学校/くちづけ、 7)音符と昆布/エイブル、 8)ぼくと魔法の言葉たち/発達障害と家族支援、 9)Mommy(マミー)、 10)500ページの夢の束/道草、 11)だってしょうがないじゃない、 12)靴ひも

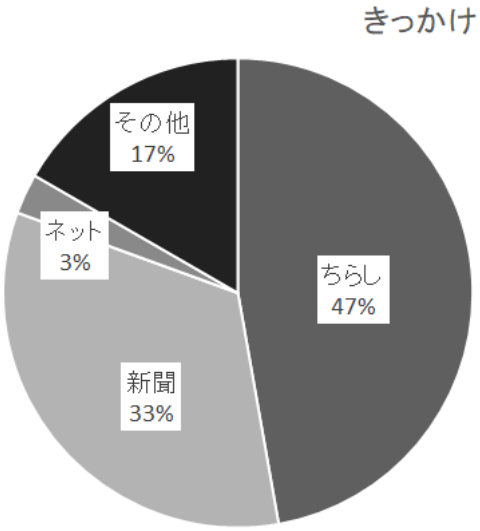
/ぼくが跳びはねる理由

６ 上映作品の希望



- 僕が跳びはねる理由
- 笑いのカイブツ
- 色んな作品を観てみたい。
- ノルマル１７歳

７ 映画会を知ったきっかけ



ちらし　　１７

（市民会館、

相談支援センターらんなど）

新聞　　１２

（北海道新聞６、室蘭民報２、無回答４）

ネット　　１

その他　　６

その他は、市の広報、知人からの紹介など

８ 来場の動機（記入のあったもの）

・前から関心有り

・障害について知りたい

・毎年来ているため

・福祉の仕事をしており、見たいと思ったため

・息子がASDであるから

・障害児保育に携わっているため関心があった。

・誘われたから

・映画が好きだから

・友人に誘われたから

・今野先生のお世話になっていたので

・昨年も来たので

・札幌の知人から『自分は仕事で行けないが…』とLINEで言いつつ勧めてくれた。

・以前から来たかった。娘の知的障害の悩みがある。

・見たかったから

・興味があるので　偶然にも開催の記事を目にすることが出来たのでよかったです！　ネット情報も出てたんですね！

・身内に自閉症のおいがいるため、仕事場でアスペルガーの方がいる為、理解が少しでも出来ればと思い参加しました。

・私自身精神障害当事者として他人事ではなく…

・シェア会の友人にお知らせを頂きました。映画を観て、色々考えるヒントがあればと思い参加しました。

・題目に興味があったから

・観たかった映画なので

・毎年、楽しみにしているから

・以前、ことばの教室やろう学校に勤務していたとき、複数の障害をもつ人がいた。
扱い方をもう少し勉強したかった。（勤務していた時）

・都合がつけば必ず来ている。

９　感想会での意見

大まかな流れ（参加者２１名、内スタッフ１０名）

※注釈　①は『友達やめた。』　②は『梅切らぬバカ』　当事者は障害を持つ人

・教職課程をとっている学生で、将来に役立てたくて観る会に参加している。

・①について、普通って何だろう。②について、現実はどうかな。と思った。

・①について、障害の有無に関わらず人との関わり方について考えさせられた。
②について、周りの人がもっとやさしい気持ちで接してくれたらと思う。

・上映会は楽しかった。また参加したい。

・平穏平和な共存の必要性を強く感じた。

・②について、障害はイレギュラーであるという考えに反対意見。「人」であるからこそ日常であることがわかった。発達障害について興味があり参加した。

・仕事の関係でグループホームを訪問したことがある。グループホームにいたという知人がいる。大人になってから支援してくれる場所があれば良いと思う。

・認知症の母の介護をしている。②の忠さんの聴覚過敏が母の症状に似ている。

・民報の掲載で知り参加した。

・①について、まあちゃんに共感、自分の行動について言われたらいやと思った。

・初めて参加。②について、子供に障害があるので将来の自分の姿と重なった。グループホームに何歳で入るのが妥当なのか。

・初めて参加　②について、感動した。

・中学生の孫が発達障害。少しでも誰かの手助けができればと思う。孫に対して感情と理屈がうまくいかない。「かわいそう」と思ってしまう。知識を持っていきたい。

・現実を映画から見ることができた。何か一緒にできたら良いと思う。
映画会参加当初は障害について人ごとのように考えていたけれど、13年のうちに身近に感じられるようになった。

・学生メンバーで上映会に関わる調査研究の担当主任をしている。

・①について、監督とまあちゃんの関係でどこまでが性格でどこまでがアスペルガー（障害）のせいなのかという監督の葛藤が描かれていた。『いただきます。』を言わないのは家庭環境の影響もある。障害と習慣の区別がつかない、障害のせいでなく環境のせいではないのかという見方が必要なのでは？そういった意味で興味深い。発達

障害の特性だと色眼鏡で見るのではなく本人を見ることが大事。
・育った環境、価値観などは一人一人が違うし、個性の可能性がある。人の物を食べちゃうのは誰でもあるし、人だからすれ違いがある。全ての人が守るべき一般常識を押し付けすぎるのは少し嫌な気持ちになる。
・私は人に食べられるのは嫌という監督の考え方自体が正しいのか？『アスペだから』という監督の考えが気になる。
・障害のある孫と話が成り立たない。どこまで理解してあげればよいのか？孫と対等じゃないという気持ちになってしまう。対等な人間として接したいが、なかなか難しい。当事者はどのように考えているのか？孫は障害が重めで言葉で通じないことが多くある。少しでも分かり合うためにはどうしたら良いかを教えてもらいたい。
・サークルの後輩・研究室の後輩に教える立場にある。発達障害の特性について悩みを抱える学生がいる。周りから冷たい目で見られている人が多い。発達障害を持っている人は、支援を本当に必要としているかどうかは見た目ではわかりにくく、怖い印象を持たれたりもする。そのため不思議と感じることで障害者への冷遇が起こるのではないか？また、自業自得と思われるところが冷遇されてしまう理由なのか？周りに迷惑をかけているような状況や、生きづらそうにしていることがいやでなんとかしたい。本人が変わる必要もあるが、周りも受け取り方を変える必要があるのでは？寛容になるべきだと思う。
・なぜ自業自得といわれるのか？それは(周囲が)理解ができないから、知ろうとしないからではないか、自ら理解しようとしていることが根本的に違うからではないか？
・発達障害当事者の間でも性格と特性の違いはよく話題になるが、当事者間でも判断は難しいものである。まあちゃんが「いただきます」を言わないのは、過去にいやなことがありトラウマがあったのではと考えていたが、違っていた。また、旅館のお菓子のシーンでは目の前にあると自分のものだと錯覚する。行動にはそれぞれ理由があるが、終盤の話し合い（ルールを決めること）が早い段階で出来ていれば、トラブルも軽減されるので、早めに行っておけばもっと良かったのではないかと思う。
・「いただきます」のシーンについては、①では言わなくて、②では忠さんが言って先に食べていた。①と②で繋がっている。自分たちが多数派（マジョリティ）だと思うと排除につながる。まあちゃんが「排除でいい」と言ったのは、自らを守るために必要だからなのではないか。「いただきます」を言わないのが嫌なのは、自分が持っている常識と違うからである。彩子さん（監督）からやってあげている感がにじみ出ており、我慢の限界が来てしまった。だからこそ裏切られたと思うのでは。

・監督は理解しようとしてあげている、熱意が強いという印象があった。実際に英語ができない人がアメリカに行ったものの言葉が通じなくてバカにされるケースがあるようだが、理解しようとしていない人にこそ問題があると思う。
・監督はしてあげているという気持ちがどこかにあったと思う。まあちゃんにも監督に対して何かしてあげていることがあるので、お互いがお互いのために何かをしてあげている関係性であり、『してあげている』ということは互いに思っていたのでは？似ている関係なのに障害の違いによってこんなにも受け取り方が違うのかと思った。これが解決していない原因なのではないか？
・解決しているのではないかと思った。お互い歩み寄っていたような気がする。まあちゃんは監督の家に行くと沢山話をしすぎてしまう。けれども、監督の話も聞きたいので交換日記という対策を講じている。合わないと思えば、すでに関係は終わっていたと思う。当事者同士だからといってもみんな仲が良いわけではない。あくまで人と人。関係性を築く上で歩み寄りが必要。
・②で、グループホームの運営に反対するシーンがあり、住民は普通に平和に暮らしたいだけというが、障害者を排除するやり方には共感できない。少数派（マイノリティー）を排除しようとして成り立つ普通・平和に暮らすとは一体何なのか？
・「優生思想」ということを考えた。健常者の考え方が正しく、障害者の考え方が違うという感じを受ける。発達障害の方が増えることには反対してしまうのに、一方で理解しようという考え方もあり矛盾しているので、概念が宙ぶらりんである。社会は変わっていくだろうけど、どうなっていくのか？
・「優生思想」については、理解し知識を持たないと論ずることは出来ないと思う。石原慎太郎は、障害者に対して『人前に出できてこっぱずかしくないのか』と発言したが、その後彼は脳梗塞で倒れ、半身不随となった。その時の彼は『情けない。』とだけ話した。誰だってそういうことになる可能性があるから大口をたたくべきではないと思う。だからこそ受け入れていくべきではないのか？
・してあげているという思いで何かをしていると、見返りを求めてしまう。つまりは、期待できる見返りがないと不満が生まれてしまうのではないか。まあちゃんが『どうして私が言えないか分かる？』と発言したのはしてもらっているという思いがあるからではないか。
・退職まで健康で働けたことに感謝している。何かボランティアをしてみたいがどうお手伝いしていいかが分からないので、失礼になるのではないかと不安になる。いざという場面で行動ができない。対応方法を教えてくれる場所があれば良いのだが。

・孫に発達障害がある。専門の先生に聞くのが一番だと思う。孫はとても活発なので、フェリーに乗せたいが落ちてしまいそうで乗せられない。そのうちなんとかなると思っている。
・伊達市に「太陽の園」という有名な障害者施設があり、障害者の聖地となっている。施設の発展に貢献した方がいて、視察に来た他市議員の「障害者同士を結婚させるのはどうか？」という否定的な意見に対し、「その考えがナチスの思想に繋がる」と話していたのを思い出した。

感想会出席者の感想

・障害者同士の結婚に対する発言が強烈でした。少しずつ、理解を深めていきたいと思います。
・大変ためになる話が聞けてよかったと思います。来年も頑張って下さい。
・障害者雇用について、イオンは確かに障害者を雇用しているが特別なことはしていない。労働力とならない者は、去れ! とのスタンスの様に見える。でも雇用するだけましかな？
・残念ながら日本では優生保護法という悪法が基で、「普通」から1ミリでも外れたらダメとされているのが実情です。特別支援学級、学校の生徒が何もできないというのは大きな間違いであることを、世間に知ってほしいですね。
・理解したいという気持ちは人間ならふつうにみんなあると思う。でもそれが状況にうまく機能する人としない人の違いは、その人が障害者に対して心に距離があるかないかの違いです。いくらわかりたくても距離がある人には無理な世界です。逆に柔軟に障害者の良いところも悪いところも受け入れ、頭だけで考えずにカラダを使って考える人は時間はかかっても許しあって分かりあうと思います。
・初めての映画がすごい印象に残りました。
・当事者の方、支援の方、ご家族が発達障害の方、教員をめざしている方、それぞれの方が真剣に問題意識をもって議論され、頭が下がりました。また、機会があればお話を聞かせてもらいたいと思いました。
・「梅切らぬバカ」は2度目でした。親元で過ごすことに決めた忠さんですが、やはり自立すべきだろうと思いました。
・「友だちやめた」はずっと考えさせられていました。監督の言葉、マーチャンの言葉、本当に心にささりました。
・感想会では何も話せませんでしたが、活発な皆さんのお話しが聞けて有意義でした。

また参加したいです。お疲れ様でした。
・ふつうは、人、それぞれだと思う。
・感想会では、どんな人がどんな考えで参加されているのか知ることができて面白い時間でした。考えや論理より素直な印象や感情をもっと聞いてみたかったかもしれません。
・どこまでが性格でどこまでがアスペルガーでから始まり、優生思想で終わった感想会ですが、障害とは何なのかを考えさせられる会でもあったと思います。先ず、アスペルガーと性格の区別し難いという事実を初めて知りました。また、区別には習慣や価値観といった多くの要素を踏まえる必要があり、一概には言えないことも分かりました。

しかし、上記のことは、「梅切らぬバカ」の忠さんが、 私達の様にルーティンがあり、家庭があり、友人があり、 仕事などで人と会っていることを考慮すると、障害も性格といった平穏なものの１つであり、多様性が含まれる様に思えます。どうあがいたとしても人は人であり、必要に感じたのであれば助けるべき対象である。つまりは、障害者という「特別」は不要であるとも思いました。何はともあれ、人はどんな思想を持っていても人であり、話や身振りからでも意見や意志を汲み取るべきであると強く思いました。

しかし、「労働を商品として売る」形で、ビジネスないし社会が回っていることを考慮すると、どうしても「役に立たない」障害者という形で問題になることも避けては通れないと思います。今回話題になった「優生思想」も社会で評価される、即ち、優れた人と劣った人を振り分けるという場面があるからこそ、出てきてしまうのではないのでしょうか？とはいえ、ナチス・ドイツが当人の意志すらも無視する形で強制的に「安楽死」させた行為は、殺人とほぼ変わりなく、非難の対象といえます。こうしたジレンマに、どう立ち向かうかを考える必要があると思いました。飛び入りでの参加でしたが、非常に有意義な時間となりました。この様な機会を設けて頂いたことに心から御礼申し上げます。
・本日の感想会は私のとって初めてのものでした。書記として参加していたのですが、一番印象的だったのは「いただきます」と言わなかったのは発達障害の特性によるものなのか本人の性格由来のものであるのかという点です。その話を聞いて人間を形成するのは「遺伝か環境か」という話を思い浮かべました。どちらか一方というわけではなく複雑に絡み合った結果人間が形成されていくのではないかと私は考えます。
様々な視点から話を聞くことができ、非常に貴重な経験であったと思います。

考察

（以下文責：三条）

上映1**『友達やめた。』**の印象として、『とても良かった』『まあ良かった』で67％とおおむね高評価と考えます。内容としては、どこまでが発達障害の特性でどこまでが性格かという部分が興味深く、当事者のリアルについても知る機会になったという意見が多く、評価は高かったように思います。

上映２**『梅切らぬバカ』**の印象として、『とても良かった』『まあ良かった』で66％と上映１の内容とほぼ同じ結果であり、おおむね高評価と考えます。作品については有名な俳優陣が出演していることから演技力が高く評価されていました。グループホームに住んでいる人々の生活を知ることが出来たり、親亡き後をどのように子供は生きていくのかを考える機会でもあり、母親の愛情はとても強く感じたというコメントもありました。

年代は50代以降が約７割を占めており、例年通りとなっていますが、一方で10代～30代の若年層の参加率も以前に比べて増加しています。

上映会全体の印象として、『とても良かった』『まあ良かった』で82％と高評価といえます。観る会のスタッフに対して、「精力的で好感が持てた」とコメントしてもらえましたが、大変ありがたいことです。他にも、「車椅子での参加についても快く受け入れて下さって感謝」のお言葉も頂戴しました。対応の幅を広げていきます。

一方で各回の参加が50名程度と例年に比べて非常に少なかったです。2023年5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、マスクの着用も自由となりましたが、参加者が少なかったことについては残念に思いました。しかしながら、４年ぶりに感想会を実施できてたいへん良かったと感じております。

希望作品については、国内作品が７５％、外国作品が２５％と国内作品が多い結果となりました。いずれもドラマよりドキュメンタリーの方が割合は高いです。ドキュメンタリーは事実に基づいた内容であることから、ドラマの演技とは異なりリアルさが増すからと考えられます。国内の作品を多く望まれる要因としては、同じ日本で当事者がどのように生活しているのか、支援を受けているのかなどを知るきっかけが欲しいのだと考えます。一方で『梅切らぬバカ』について、出演されていた塚地さんや加賀さんなどの有名な俳優の演技が違和感なく観る事が出来たという評価もありまし

た。ドラマについても『アストリッドとラファエル』『厨房のありす』といった医療監修に基づいて制作されるテレビドラマなどは、以前よりも支持率は高まっている傾向がみられます。しかしながらこれらの２作品については、傑出した能力を持っている当事者が主人公として描かれているため、ギフテッド要素が強い印象を与えます。多くの当事者は自分の生きづらさも抱えつつ、自己肯定感が低く、自分は周りの人々よりも劣っていると考えてしまう傾向が知られています。より一般的な当事者（ギフテッドではない）についての内容を求める当事者もいると思われます（2022年にドラマ化された『僕の大好きな妻』はその内容に近いと考えます）。

知ったきっかけはちらしと新聞（北海道新聞・室蘭民報）が8割を占めていました。一方でネットがわずか３％であり、来場者の大半はネットの情報ではなく、それ以外の情報でこの上映会を知ったことになります。また、自身もしくはお子さんや家族が当事者という方々の参加も増えてきたように思います。支援者の方からも『もっと学んでみたい、知りたい。』という意見もあり、理解をお互い深めあう機会となれる上映会を考えていくことにします。

作品選定経過ですが、2021年度に選定しながらも感染症対策で中止になった「友達やめた。」を今回取り上げるかどうかを検討しました。前回のアンケート結果には、希望する映画にこの「友達やめた。」が複数上がっていたこともあり、選定に至りました。また、「梅切らぬバカ」についてもメンバー間で協議し、上映を決定しました。話し合いの際には、できるだけ予告編を観たり映画評などを参考にしたりします。日頃から、話題作や原作などにも幅広く関心をもって、自信をもって紹介できる作品を見つけていきたいと思っています。

映画会参加の動機については、来場者の中には、何らかの形で発達障害の当事者と関係がある方がいらっしゃいます。新しい知識を得たいという思いもあれば、身近な現実と向き合う力を求めている場合もあるようです。なかなか理解しにくいのは、当事者ごとに特性の現れ方が違っている、ということがあります。ですから、一つの映画を観たから安心できるようになる、とはなりません。あくまでも一つのきっかけです。

その点、感想を述べ合う集まりとしての「感想会」は大きな意味を持っています。映画鑑賞と感想を述べ合う機会の両方を、今後もこの会の大事な柱としていきたいと考えています。この会から発展して活動中の「シェアリング教育研究会」にも関心をもってもらえると有り難いです。

個人的な感想と世の中の展望

（以下文責：三条）

発達障害という言葉が広まってだいぶ経ってきましたが、果たして今日までに皆が理解を示しているか、または同じ当事者だからみんな理解し分かりあっているのかといえば残念ながらそうではないように思います。配慮や制度も進んでいる中でも、まだまだ理解が足りないのと、『発達障害だから〇〇の対応をしなくてはならない』という固定観念も多いように思います。今回の両作品でもそうした描写があり、改めて考えさせられました。感想会でも述べられたように一人一人のことを理解することが大事だと感じます。

日本でも最近はテレビドラマ（例：厨房のありす、アストリッドとラファエル、…両番組は同じ曜日でほぼ同時刻で放映されています。発達障害を題材にしていてその理解を促す機会が増えているのは意義のあることだと感じます。視聴者間で情報共有できるとますます理解が促進されると思います）などで、発達障害を題材にした映像作品が放送されるようになってきました。一般社会での話題にもなり、診断を求めるケースも増加していることから今後も発達障害を背景にした作品が増えていくものと考えます。一方で発達障害の人は皆こうだといった偏った理解のリスクもあります。実態は皆がそれぞれの特性をもち、得手不得手も大きく違います。発達障害の診断名で判断をするのではなくその人を知るということが大事なのだと感じます。

障害者雇用の対象に発達障害が加わったのも最近で、法定雇用率が現在は 2.3％とされています。2024年4月には、精神障害者（発達障害も含む）の短時間勤務（週10～20時間未満）も雇用率算定の対象となります。さらに法定雇用率は、2.5％に引き上げられて、加えて2026年7月からは2.7％と段階的に引き上げとなります。障害者雇用の促進が期待されます（障害者雇用については、数値以外でも課題になっている内容が多いため、その他の点についてもぜひ関心をもってください)。

現在、神経発達症が正式名称(DSM-5)となりました。どう変化していくのか不安はありますが、人びとが平和で生きやすい世の中になるように願っています。

映画上映会における発達障害に対する観客のイメージ変化

―とくに上映前後での平和に関わる印象比較を SD 法で検討する―

問題と目的

発達障害に関する社会的な認知は広がって来ている。例えばインターネット記事で発達障害をキーワードに検索を試みると、一ヶ月間(2024 年 1 月 1 日から 31 日)でおよそ 1200 件以上がヒットする。これは毎日数十件の計算になる。しかし、取り上げられ方には千差万別があり、例えば「発達障害女性が、なぜか行く先々でモテてしまう理由」などの興味本位な視点からの記事も存在する。こうした扇情的な傾向に影響されるのではなく、発達障害について多くを知りたいと思う人たちもいる。そうした人たちに、映画鑑賞の機会を提供しようとしている団体として、室蘭工業大学「発達障害の映画を観る会」は活動している。

この取り組みの一環として、2024 年 1 月に第 13 回映画無料上映会が計画され、その開催に合わせて来場の観客に質問紙調査を実施することにした。これは一般財団法人テコス教育振興会の研究助成を得たことに対する研究報告として計画された。障害者が社会において安定的な処遇を確保できるために、平和の維持は前提条件として重要である。研究助成の条件である平和創造に資する研究が目指された。

映画鑑賞後の発達障害に関するイメージ変化については、今野・前田(2011)で、より「明るく・こわくなく・穏やか」なポジティブな印象に変化することが示されていた。さらに、発達障害との接点があまりない群では「関わりたい」の質問に対し、態度保留で無変化の傾向が見られた。青年男子層に限った分析として、「自閉症と初めて接する場面では、多様な見方や対応法があることを認め合えて、『模範的』な反応だけが要求されることのないよう配慮された条件が必要」になると結論づけている。

養護教育を学ぶ大学院生に対して映画から受ける教育的な影響を調べた研究に、高橋・粟野・佐藤・渡辺・角田・斉藤・古池(2019)がある。映画と医療と教育の三分野からの視点で教育場面に映画を活用する取り組み(シネメデュケーション)であり、4 名の養護教育専攻の大学院生が対象となっていた。個別の聞き取り調査から、「孤児院の子どもたちが求める愛情と権利・経験や人との関わりによる成長」など、言及内容は 7 つのカテゴリーに分類された。映画鑑賞から深い洞察が得られる可能性について論究されていた。

自身の専門とする領域に関する映画を鑑賞する場合とは違って、日常生活の延長場面で映画を鑑賞する際にも、鑑賞後に各自のイメージが変化することは想像できるが実際の調査はあまり行われていない。それは個別の聞き取り調査などの実施が、現実的には難しいことが理由になる。そこで「印象変化」に限定した簡便な方法による質問紙調査なら、協力を得やすいと考えて SD 法を用いることにした。SD 法は形容詞の対を提示して、テーマに対する印象の評定を求める方法である。高橋(2013)では、約 280 名の大学生に老人イメージの調査をしたように、大人数に適用しやすい調査法といえる。この方法で用いる形容詞対の選定には、田辺(1975)を参考にした。

本調査の目的は、障害者が登場する映画の上映前後で、観客の発達障害に関するイメージがポジティブな変化を示すかどうかを検討することである。加えて、障害者を含む社会にとって特に重要な意味を持つ平和に関するイメージの変化に注目することにした。

方　　法

質問紙による観客の回答を、上映前後で比較することにした。SD 法による質問を用い、印象の変化が小さいものであっても記録しやすくなるように配慮した。また、既に周知されている社会的な正論を答えるのではなく、回答者個人の印象変化がそのまま反映されるような形式とした。具体的には印象表現の形容詞対を上から 13 対（幸せな―不幸な、優秀な―劣っている、手際のよい―手際の悪い、陽気な―陰気な、共生すべき―共生できない、迷惑でない―迷惑である、関わりたい―関わりたくない、安全な―危険な、暖かい―冷たい、わかりやすい―わかりにくい、強い―弱い、平和な―争っている、慎重な―軽率な）並べた。配列には、ポジティブな表現（対例示の先頭の語）が左右の一方に偏らないように配慮した。また形容詞対の中央部分には、評定用に 7 段階の目盛り（とても―かなり―やや―中間―やや―かなり―とても）を配した。上映前に回収する質問紙は色つき用紙にして間違いを防ぎ、また上映前後で形容詞対の配列を変えて、以前の記入内容が影響しにくいようにした。

二種類の用紙には同じ通し番号を付け、同一回答者の目印にした。回収の手続きは次のようにした。①上映前にアナウンスをして、上映前(A)の色つきの用紙に記入を求め、会場内を巡回してその場で回収した。②終演後も同様に依頼のアナウンスをし、上映後(B)の白い用紙に記入を求め、会場内の巡回と会場外の受付で回収するようにした。③途中入場や途中退場があった場合は、その都度個別に依頼して対応するようにした。

観客に対する依頼と回収とは別に、主催者側のスタッフにも回答を求めることにした。この集計は、観客とは別に行った。

結　　果

上映前(A)の調査用紙の回収数は 42 で、上映後(B)の回収数は 40 であった。このうち上映前後の通し番号がそろっていて、回答内容に不備(例えば全ての評定が 4 など)のないものが 37 件あったので、これらを調査対象とした。

調査用紙はＡとＢで、形容詞対の配列順を変えていたので、それらを統一した順番に並べ直した。さらに、評定を数値化するために、ネガティブな語(例えば、陰気な)の「とても」を 1 とし、ポジティブな語(例えば、陽気な)の「とても」を 7 と置き換えた。「かなり・やや」は 2 か 6、3 か 5 にそれぞれ置き換え、中間は 4 に置き換えた。表 1 は評定を数値化した結果。

表1　評定のばらつき方

	1	2	3	4	5	6	7
上映前	15	35	67	195	72	43	54
上映後	15	21	44	228	61	51	61

数値化データを用いたクラスター分析で、回答者のグループ分けを行った。これは回答の仕方がより似ている場合に、より近い位置で同じクラスター(房)となって表され、最終的には一つのクラスターに統合される。用いるデータは上映の前後で二種類あるが、全体で一つのデータとして扱うことにした。こうすることで、鑑賞後だけでなく鑑賞前に既に各個人がもっていた発達障害に対してのイメージの違いについても、分析の対象とすることができるはずである。図１に結果を示した。クラスター分析には HADver.17 を利用し、ward 法を用いた。

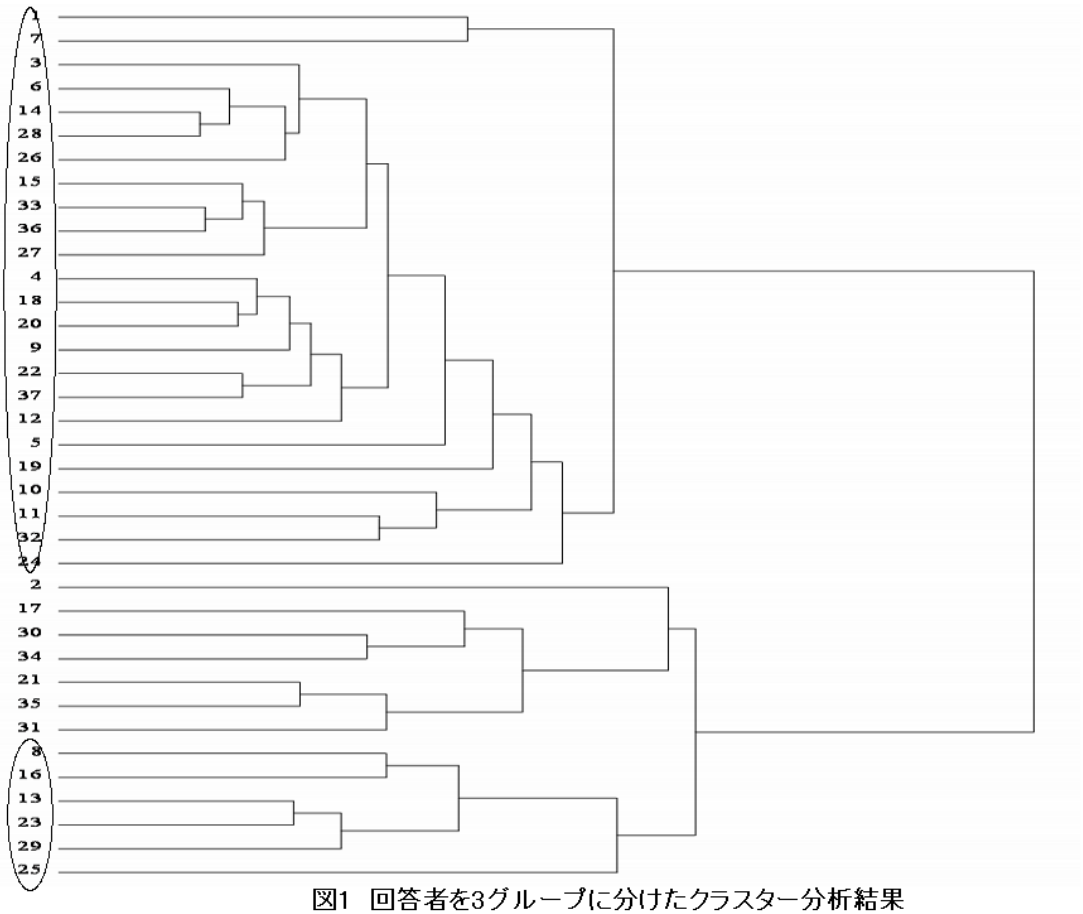


図1　回答者を3グループに分けたクラスター分析結果

三つのクラスターで回答者を分けて、第一群(24 名)と第二群(7 名)と第三群(6 名)と名付けた。1 から 7 までに数値化した評定を質問ごとに平均し、群の全体的な傾向を折れ線グラフに示した(図 2・図 3・図 4)。グラフの右にいくほどポジティブな評定で、左にいくほどネガティブな評定となる。縦軸は形容詞対で、つぎの順である。

１幸せな　２優秀な　３手際のよい　４陽気な　５わかりやすい　６強い　７平和な
８共生すべき　９迷惑でない　10 関わりたい　11 安全な　12 暖かい　13 慎重な

第一群は上映の前後で変化がほとんど見られない。第二群は 8 番目の質問以降でポジティブな評定が多く、質問全体では上映後にやや増えているように見える。第三群では、ほぼ全ての評定がポジティブ側にあるが、一部には上映後に左側のネガティブ側に変化した項目も見られた。また、13 番目の「慎重な」では、上映前よりも上映後に大きくポジティブ側に変化していた。

上映前後の要因と、回答者三群の要因と、13 の質問の三要因の分散分析をおこなった。これは数値化された評定を群ごとに平均してから、その散らばり方(分散)を比べて群の間に差があるかどうかを統計的に検定するためである。分散分析には js-STAR XR+のサイトを利用した。

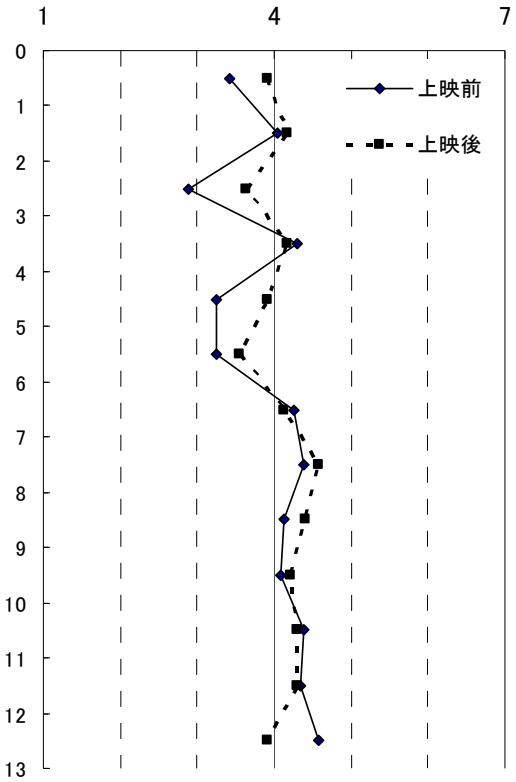


図2　第一群の評定平均値

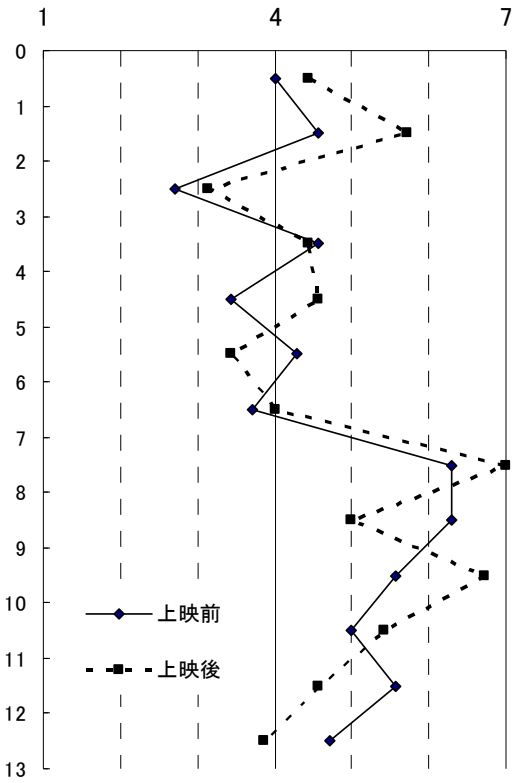


図3　第二群の評定平均値

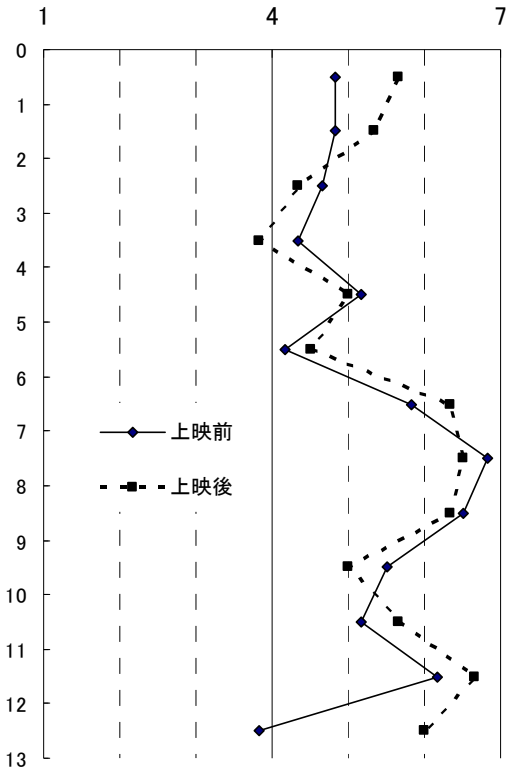


図4　第三群の評定平均値

三要因の混合計画の分散分析をおこなった結果、上映前後の要因と回答者三群の要因と質問の要因で二次の交互作用に有意差($F(24,408)=1.99$, $p<.05$)が得られた。他に得られた有意な交互作用としては、三群の回答者要因と 13 の質問要因の一次の交互作用($F(24,408)=3.10$ $p<.01$)があり、主効果としては回答者要因($F(2,34)=32.98$, $p<.01$)と、質問要因($F(12,408)=13.67$ $p<.01$)に有意差が得られた。

二次の交互作用が有意になったので下位検査(Holm 法)をおこなった。図 5 に示した「慎重な―軽率な」の形容詞対において、回答者要因と上映前後の要因の交互作用に有意差($F(2,34)=8.77$ $<.01$)が得られた。第三群の「慎重な」の印象は上映後にポジティブに変化した($F(1,34)=14.35$ $p<.01$)。第三群は上映後に第一群と第二群との間に 5%水準の有意差を示した(第三群＞第一群、第三群＞第二群)。

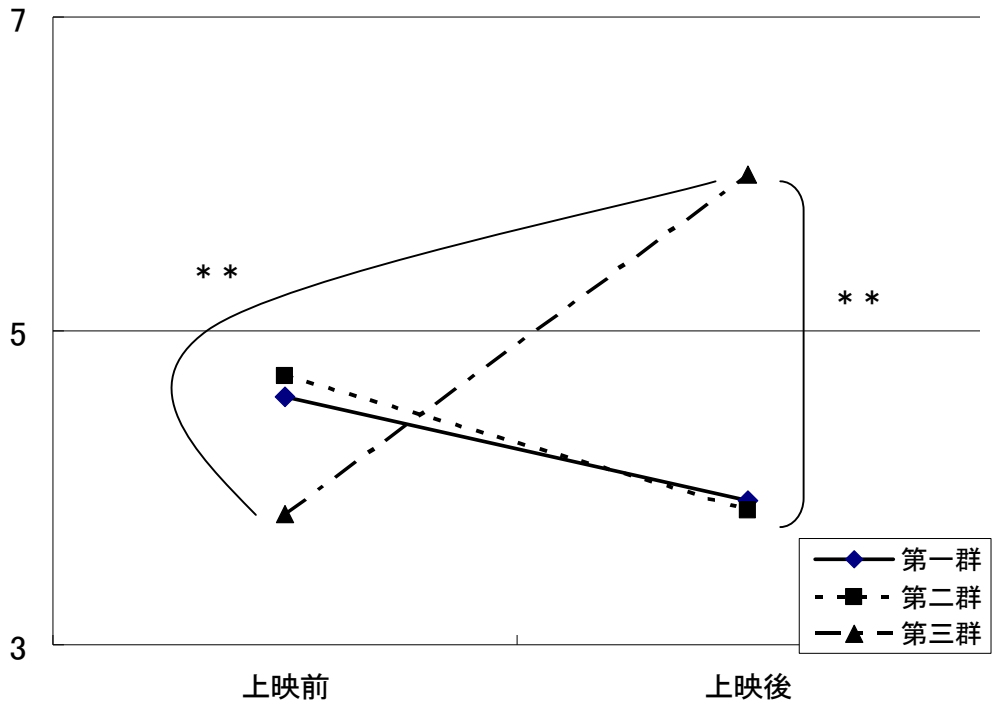


図5 「慎重な」の質問で第三群が上映後に評価を上げた結果　** p<.01

上記の有意差以外では、「10 関わりたい」において第二群が上映後に第一群や第三群よりもポジティブな評定を増やす傾向が見られた。また、「12 暖かい」では第二群が上映後にポジティブな評定を減じる傾向が見られた。

注目していた「7 平和な」の評定では、どの群にも上映前後の変化は見られなかった。交互作用に有意差はなかったが、回答者群の要因に有意差が得られた($F(2,34)=16.79$ $p<.01$)ので下位検査をすると、第三群が第一群や第二群よりもポジティブに評定していることが5%水準で示された。

上映の前後変化に注目すると、回答者群による差はなかったがポジティブ評定が有意に増えた形容詞対が二つあった。一つは「2 優秀な」で、上映前よりも上映後にポジティブ評定が 5%水準で有意に増えていた。またポジティブ評定の多さを群間で比較すると、第二群＞第一群、第三群＞第一群の有意差が 5%水準で見られた。もう一つの形容詞対は「5 わかりやすい」で、同様に上映前よりも上映後にポジティブ評定が 5%水準で有意に増えていた。さらにポジティブ評定の多さを群間で比較すると、第三群＞第一群、第三群＞第二群の有意差が 5%水準であった。

上述の結果から、つぎのような推論が可能になる。分析対象とした回答者 37 名は、回答傾向から 3 グループに分けることができた。第一群は 24 名で、映画上映の前と後でも評定の違いがほとんど見られなかった。この群は他の群より三倍以上の人数だった。つまり、多くの人にとって、発達障害のイメージは映画鑑賞の前後でほとんど影響を受けなかったといえる。

第二群は 7 名で構成され、上映前よりも上映後にポジティブな評定が増える傾向が見られた。具体的には「10 関わりたい」の形容詞対で上映の前後にポジティブ評定が増える傾向

を示した。一方で、「12 暖かい」では上映後にポジティブな評定が下がる傾向を示した。こうしたことから、この群に該当する一部の人は映画鑑賞によって発達障害のイメージをポジティブなものに変化させると見なせる。

第三群は 6 名と最も少なかったが、他の群より特徴的であった。「13 慎重な」の形容詞対において、上映の前後でポジティブ評定の増減を比べると、他の群ではポジティブ評定が減ったのに対して第三群のみが増加していた。また、「7 平和な」について他の群と比較すると、第三群は第一群と第二群よりもポジティブ評定が多かった。つまり、この群は発達障害について、映画を鑑賞するという体験でよりポジティブなイメージを積極的に増幅させたと想像できる。

考　　察

映画鑑賞という体験は、多様な意味づけが可能であり、単純明快な娯楽から未知の事実を知り得る学習活動までの幅広い役割を果たすものだといえる。また、鑑賞後に意味づけが変わることもあるし、個人的な体験を交流させ映画評を語り合うことで社会的な広がりをもつ可能性もある。この調査研究では、映画の内容については一切言及していない。それは、映画そのものの影響力を取り上げて条件の一つにしようとするならば、それを変数化するための能力や労力が当然必要とされるが、そうした力が研究する側に備わっていないからである。

ここで課題化できたのは、映画を観る側に限定して、どのようなイメージの変化が鑑賞前後に現れるかの比較である。しかも上映会に選んだ作品は、発達障害がテーマの一つである映画なので、発達障害に対してのイメージ変化を調べている。当然、観客一人一人で発達障害の捉え方は違っているはずである。予めその捉え方を調整して、より客観的な比較を可能にする研究も考え得るが、今回は一人一人が日常生活で何となくイメージしている感覚をベースにしようとしている。しかし、その後に同じ映画を鑑賞する、という体験をした後には、共通した土台を仮定できるはずである。少なくとも鑑賞後のしばらくの時間は、共通体験の影響は一つの場の力として大きく個人に及んでいるはずである。そうした条件から読み取れる事実は、貴重な事実を示しているはずである。

結果からは、全体の三分の二ほどの人は、映画鑑賞の体験直後でも以前から自分の中にあったイメージはほとんど影響を受けない、という事実であった。これには、調査テーマの発達障害が固定的なイメージで記憶されている可能性がある。社会に定着しているステレオタイプが個人のなかに頑強にあって、新たな刺激や情報が入って来にくい状況だった可能性が考えられる。しかし一方で、映画上映会に参加する時点で、積極的で行動的な関心をもっているはずなので、無関心さの表れとは解釈できない。これまでに個人が積み重ねてきた発達障害イメージがあって、それを上書きするまでには映画の鑑賞だけでは不充分である、と理解すべきであろう。

最多人数の第一群がどのような年齢構成なのか、性別に偏りはないのか、あるいはこれまでの映画上映会への参加経験などの条件を加えることで、さらに細かい分析も可能になるはずであったが、今回は調査票にそうした記入欄は設けていない。それは、第一に回答者が抵抗感をもたずに素早く記入できるようにと考えたからであった。別に回収したアンケート調査からは、来場者のだいたいの内訳を知ることが出来る。年代では 50 代以上が全体の七割を占め、性別では半分以上が女性である。これまでに上映会に参加したことの

ある人は六割ほどであった。こうした属性が第一群にそのまま反映されるのかどうかは、簡単に当てはめられない。同様に、第二群や第三群の人たちに特定の属性の人が多い可能性も考えられるが、軽々しく決めつけることはできない。例えば、映画を観てすぐに発達障害のイメージが変わった人には映画会初参加の人が多い、とは言えないのである。

映画の鑑賞体験前後で有意な変化が認められたのは、第三群における「慎重な―軽率な」の形容詞対であった。第一群と第二群では、この形容詞対に対するポジティブ評定は上映後に下がっているので、第三群が評定を上げたのが際立っている。また、回答者要因の主効果が有意になっていて、それは第一群よりも第二群と第三群のポジティブ評定が多いことを意味していた。上映前の段階で既に第二群と第三群のポジティブ評定が多く、それは上映後にも維持されていた。上映前後で変化はなかったが、第一群＜第二群＜第三群のポジティブ評定の多さが認められた。これは、映画の鑑賞体験の有無とは別に第三群のように発達障害に対してポジティブに受け止めている人たちがいることを示している。しかし、このグループの人たちが「慎重さ」を上映後にポジティブな評定に変えたのはなぜであろうか。逆にいうと、このグループでの「慎重さ」の評定は、上映前にはネガティブ側にあったのはなぜなのか。今回の調査結果ではこれ以上の推論は難しい。映画の内容も条件に加えた調査が期待される。

とくに注目していた「平和である―争っている」の形容詞対については、上映前後で変化した有意な結果は得られなかった。回答者要因の主効果から、第一群と第二群よりも第三群のポジティブ評定が多いことが示された。第三群は発達障害を平和と関連付けて積極的に評価しているといえる。これは、平和が損なわれることで、いわゆる障害者への差別などがより現実化することへの恐れを背景としているものかもしれない。この点もさらなる調査研究で明かされることが期待される。

それぞれの群を特徴づける要約をしてみた。発達障害に対するイメージで、第一群は映画鑑賞では変化しない固定的なイメージをもっている人たちで人数が最も多かった。第二群はイメージを変化させやすい人たちで、鑑賞後にポジティブな変化が多くあったが、少数のネガティブ変化もあった。第三群は映画鑑賞の前からポジティブな評定が多かった人たちで、発達障害の「軽率な」イメージを「慎重な」なイメージに変化させた。

以上は観客のデータに基づく分析内容であった。最後に映画会を開催した側のスタッフのデータ(8 名分)について言及しておく。学部大学生 4 名(男 1 女 3)と社会人 4 名(男 2 女 2)のデータが対象とされた。評定の平均値を比べると、スタッフの発達障害に対するイメージ変化が類似していたのは第二群であった。ただし、この第二群との類似は上映前の段階で認められていて、上映後にはなくなっていた。つまり、スタッフは「イメージを変化させやすい」傾向をもち、上映後には多くをポジティブに変化させた人たちであった。

本研究の限界と課題

本研究では、映画鑑賞の体験後に観客が発達障害のイメージをポジティブな方向に変化させる実態を SD 法でとらえた。ただし、そうした変化を見せた観客は、三分の一程度にとどまることを示した。変化の仕方も、全体的なポジティブ変化が見られたが、とくに変化しやすいグループでは、ネガティブな変化を示す場合もあった。ポジティブに変化した具体的な形容詞対は「慎重な―軽率な」であり、それは観客全体の二割に満たない人数で見られた変化であった。映画鑑賞という同一の体験があっても、それまで各個人がもってい

たイメージを変化させるのは、一部の人たちに限られることが明らかになった。

少ない人数であっても、変化を引き出せることには大事な意味があるといえる。映画鑑賞の機会を設ける取り組みを、今後も継続させていく意義は大きい。ただし、どのような人たちがイメージを変化させやすいかを知るためには、今回の調査内容では不充分であり調査方法自体も再検討が必要になる。記入の負担を大きくしないように工夫しながら、回答者の属性について、年代や性別や上映会の参加経験などがデータ化されることが期待される。また、調査方法も SD 法に限ることなく幅広く検討される必要がある。質問紙調査では詳しく聞き取ることが難しい、上映会の参加動機などを個別のインタビューなどで記録していく調査方法も検討すべきである。

発達障害の個人での理解と社会全体での対応が進むには、何か一つの出来事で大きく変化することは望みにくい。一見すると何も変わっていないようでも、小さな変化が積み重なっていくことで、しだいに暮らしよい社会が作られていくと考えるべきであろう。映画鑑賞の体験で、心に変化の兆しを見せた人たちは確実にいたので、その道がこの先につながっていることを実感できた。それが人間社会全体、世界全体の平和づくりにも通じる道であることは確実である。

（研究主任:八木恒星、研究員:今野博信）

注と引用文献

HADver.17　関西学院大学社会学部の清水裕士教授が自身のサイトで提供している Excel で動くフリーの統計分析用プログラム。基礎的な分析から統計的検定、分散分析、回帰分析、一般化線形モデル、因子分析、構造方程式モデル、階層線形モデルなどの多変量解析を実行することができる。https://norimune.net/had（2024.2.15　確認）

js-STAR XR+　わかりやすいインターフェースとかんたんな操作により，驚くほどすばやくデータ分析ができる，無償の統計ソフト。ダウンロードしての利用以外に、ブラウザ上で動作するため，Windows でも Mac でも使用でる。3 要因までの分散分析が可能。
https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm

今野 博信, 前田 潤, 2011, 映画鑑賞による自閉症イメージの変化(臨床,口頭発表), 日本教育心理学会総会発表論文集, 53 巻, p. 103

高橋 一公, 2013, 大学生の老人イメージ測定の試み ―自己老人イメージの SD 法とテキストマイニングによる分析を通して―, 東京未来大学研究紀要, 6 巻, p. 85-94

高橋 朋子, 粟野智美, 佐藤亜純, 渡辺梨紗子, 角田愛, 斉藤ふくみ, & 古池雄治, 2019, 養護教育専攻大学院生が『The Cider House Rules』から得たインパクト. ―― 質的分析を通して――, 茨城大学教育実践研究 38 巻, 115-124

田辺 正友, 1972, 概念の発達的変化の測定に関する方法論的検討 ― ＳＤ法の適用について―: 奈良教育大学教育研究所, 101–108 p.

第13 回無料上映会 ①友達やめた。②梅切らぬバカ

2024.1.27(土)　①13:05～14:30　②14:40～16:00

2020 年日本 ドキュメンタリー　2021 年日本 ドラマ

室蘭工業大学 大学会館多目的ホール　参加者６０名（スタッフ１１名を含む）

いろんな方々のご支援に助けられて、今回の企画を実施

できました。あらためて感謝の気持ちをお伝えします。

作業場所や機材保管などで、ひと文化系領域前田研究室にお世話になりました。
研究調査へのテコス教育財団からの助成に感謝します。

※この報告集へのご意見ご感想は、下記のメールアドレス宛にどうぞ。

室蘭工業大学「発達障害の映画を観る会」ホームページ http://muroraneiga.web.fc2.com/

eigakai22@naravan.net

published February 28, 2024